

## 1. 略歴

1997年4月	上智大学文学部英文学科 入学
2001年3月	同 卒業
2001年4月	上智大学文学部哲学科 入学 (3年次学士入学)
2003年3月	同 卒業
2003年4月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻哲学専門分野修士課程 入学
2005年3月	同 修了 (修士 (文学) 取得)
2005年4月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻哲学専門分野博士課程 進学
2006年6月	東京大学大学院人文社会系研究科 21世紀COE「死生学の構築」リサーチアシスタント (~2007年3月)
2007年10月	東京大学大学院人文社会系研究科グローバルCOE「死生学の展開と組織化」リサーチ アシスタント (~2008年3月)
2010年3月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻哲学専門分野博士課程 単位取得退学
2010年4月	上智大学大学院哲学研究科 特別研究員 (~2013年3月)
2013年5月	東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター (上廣死生学・応用倫理講座) 特任研究員
2013年9月	博士 (文学) 取得 (東京大学大学院人文社会系研究科)
2014年4月	三重県立看護大学看護学部看護学科 准教授
2017年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 特任准教授

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

行為論、ケアの倫理、臨床死生学

### b 研究課題

#### (1) ケアの倫理における「共感」と「認識をめぐる責任」についての哲学的分析とその臨床的展開

ケアの倫理における中心概念である「共感」に関して、その身体的・情動的側面および認知的・知性的側面を主題的に分析する。そのことを通して「共感」とそれに伴う「認識上の責任」を、臨床の場に即した複雑さと深みを備えたものとして理論化する。

ケアの倫理によれば、功利主義的な生命倫理は、患者（患者家族）の置かれている具体的な状況に関する「認識上の責任」（責任をもって認識すること）を果たしていない点で不十分だとされる。このような具体的な状況の認知において、共感が重要な働きをすることは疑いえない。しかし他方、共感には認知的なバイアスが働くことが指摘されている。そこで、共感の危うさや困難さを踏まえつつ、医療従事者—患者（患者家族）関係における望ましい共感のあり方と、それに伴う認識上の責任を明らかにする。

#### (2) 関係的な自律論の構築とその臨床的展開

ケアの倫理の立場から関係的な自律論を構築すると同時にその臨床的応用を試みる。生命倫理における個人主義的な自律論は、個人の独立性と他者からの不干渉を基調とする自己決定を核としてきた。それに対してケアの倫理は、人間の相互依存性と傷つきやすさに着目する。そして一定の依存関係や社会的環境の中で育まれるものとして自律を捉える。しかしながら、依存性と自律性は緊張関係にもあるため、個人主義的な自律論はなお根深い。そこで、自律性と依存性の諸相および自律性と依存性の結びつきについて徹底的に検討することを通して、関係的な自律論をより十全なものにする。そのうえで、医療従事者・患者・患者家族、それを取り巻く社会的／文化的環境という要素を考慮しつつ、関係的な自律の概念を、臨床における共同意思決定プロセスに適うものへと鍛え上げたい。

### c 概要と自己評価

#### (1) 病いの語りをめぐる認識的不正義と共感

病いの語りや証言に関する認識的不正義について考察した。病いによって打ちのめされる体験をした患者の証言は、極めて重要であるにもかかわらず、病いの文脈における認識上の不正義のうちには、そういった証言の重要性を過小に評価するということが、中心的なものとして含まれている。そこで、とりわけ病いの語りの中でも、最も無視

され周縁化されやすい「混沌の語り」に注目して、それがいかんとして認識の次元で社会的に排除されているのかを探究した。

その際、混沌とした病苦に対する共感的な知の重要性に着目し、認識的排除を是正するには、共感はどのように機能しうるのか、また機能しなければならないのか、という問題に取り組んだ。具体的には、「共感が認識上の責任を引き受けるものであるとき、その共感、病いに関する認識上の不正義に抗うメカニズムを、どのような形で備えていなければならないのか」という問題を考察した。とりわけ、共感や認識的な責任を、個人々の相互作用のレベルに着目するミクロな視点のみならず、社会的構造のレベルに着目するマクロな視点からも分析した。その成果は“*Illness Narratives and Epistemic Injustice: Toward Extended Empathic Knowledge*”として *Knowers and Knowledge in East West Philosophy: Epistemology Extended* (ed., Karyn L. Lai, Palgrave Macmillan, 2021)の第六章として刊行された。

## (2) タイミングと意思決定支援の倫理

患者本人を中心とした共同意思決定のプロセスを踏むためには、本人の時間感覚を尊重するようなコミュニケーションが要求される。このような基本的発想のもと、倫理的に妥当な意思決定支援の要件を哲学的に考察した。まず、患者本人が体験する、周囲の人々との時間感覚のずれが、本人の孤立感をいっそう深刻なものにしている点に注目した。患者本人と医療者の間にある時間感覚の齟齬が何らかの仕方では是正されない限り、医療者は、患者本人のタイミングに合った働きかけや対応ができないままになり——すなわち、患者にとってタイミングが早すぎたり遅すぎたりして——結果として、意思決定支援に必要とされる、患者との信頼関係やコミュニケーションの深化が妨げられる。この点を踏まえ、共同意思決定に不可欠な信頼関係やコミュニケーションの深化には、患者の現在停留的な時間感覚に寄り添う「現在中心的な共時化」が極めて重要であると論じた。

さらに、その共時化によって共有されることになる現在を、カイロス＝危機的現在という観点から分析した。そうすることで、意思決定プロセスの共有がカイロスの共有を含む点を明らかにした。以上の研究成果は、論文「意思決定支援の倫理とカイロスの共有——本人の時間感覚に寄り添う」(『死生学・応用倫理研究』第27号)にまとめられている。

## d 主要業績

### (1) 論文

Misa Komatsu, Seisuke Hayakawa, Norikazu Ohnishi, Kazunari Takemura, Makoto Tabata, Ritsuko Shimizu, “Developing a Cooperative Caring Model for Nurses and Older Adults with Dementia,” *International Journal for Human Caring* 24(4), 290-297, 2020.12

早川正祐, 「自己実現の自由と不自由——相互性がもたらす現在享受的な自己実現」、『哲学』第72号(日本哲学会編)、21-35, 2021.4

Seisuke Hayakawa, “Illness Narratives and Epistemic Injustice: Toward Extended Empathic Knowledge,” in *Knowers and Knowledge in East-West Philosophy: Epistemology Extended* (ed. Karyn, L. Lai), Cham: Palgrave Macmillan, 111-138, 2021.10

早川正祐, 「臨床におけるケアの倫理——混沌の語りから考える」、『臨床倫理の考え方と実践——医療・ケアチームのための事例検討法』(清水哲郎・会田薫子・田代志門編著)、東京大学出版会、92-100、2022.2

早川正祐, 「意思決定支援の倫理とカイロスの共有——本人の時間感覚に寄り添う」、『死生学・応用倫理研究』第27号、(東京大学大学院人文社会系研究科 死生学・応用倫理センター)、123-149、2022.3

### (2) 翻訳

早川正祐・松田一郎訳『ケアの倫理と共感』、勁草書房、2021.11= Michael Slote (2007), *The Ethics of Care and Empathy*, Routledge.

### (3) 学会講演

Katsunori Miyahara and Seisuke Hayakawa, “Empathic perspective-taking, mental simulation, and receptivity,” The 95th Joint Session of the Aristotelian Society and the Mind Association 2021, June.

## 3. 主な社会活動

### (1) 他機関での講義等

学術講演、「成熟した共感と感情主義的な徳倫理学の展開」、東京都高等学校公民科「倫理」「現代社会」研究会、2022.3  
セミナー、三重大学附属病院看護部「倫理コーディネータ養成プログラム」講師、2021.10

### (2) 学会

哲学会、2003.4～現在

上智大学哲学会、2003.4～現在

日本倫理学会、2005.8～現在

日本科学哲学会、2006.12～現在

日本哲学会、2006.12～現在

ケアの哲学学会、2016.9～現在

American Philosophical Association、2021～現在